

---

# 俺の彼女は乙女系っ！？

小野宮 夢遊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺の彼女は乙女系っ!？

### 【Nコード】

N6336S

### 【作者名】

小野宮 夢遊

### 【あらすじ】

俺の彼女は乙女系ですっ。

……いやっ、そのっ、そう言う意味じゃなくて……  
っ。

……乙女ロード系です……っ。

更新が滞っています。必ず更新致します。申し訳ありません  
っ。

## プロローグ 俺の彼女を紹介しますっ！（前書き）

恋愛のジャンルに登録しておいて何なのですが、私自身恋愛の経験値はゼロに近く、男女の心情などが良く分からない事がありますっ。

それなので、もしおかしな点がありましたら、遠慮無くご指摘願いますっ。

それ以外の脱字や文法上の間違いなどもありましたら、同様に指摘願いますっ。

下手な文章ですが、読んで頂けましたら幸いですっ。

僭越ながら、どうか宜しく御願致しますっ。

## プロローグ 俺の彼女を紹介しますっ！

俺の彼女は乙女系ですっ。

．．．．．あっ、いやっ、そのっ．．．．．。  
．．．．．きつと、俺の言っている事と貴方の思っている事は  
違うんだけど．．．．．。

．．．．．えっ？女の子の子らしい子って意味じゃないのか  
って？

いやいやいやいやっ、違いますよっ、そういう意味じゃ無いです  
っ！

．．．．．確かに彼女は服には気を遣うし、化粧もちゃんとし  
てるし、女の子らしい子ですよっ！ファッション雑誌とかは読まな  
いみたいだけど．．．．．。

．．．．．いやっ、でもそういう意味で言ったんじゃないんで  
すっ。

．．．．．あ　っ、そのっ、なんていうか言いにくいんで  
すけど．．．．．。

俺の彼女は乙女系ですっ。

．．．．．いやっ、そのっ、そうじゃなくて．．．．．っ。

．．．．．乙女ロード系です．．．．．っ。

第一話 俺の彼女は池袋にやって来ましたっ！

桜が儂くその花弁を地へと落としてゆき、青い葉を付け始めた春のある日。

俺は、ビルの森の中に見えるその透き通った青い空を仰ぎ見た。まったく、都会は狭苦しくて疲れる。

あの大きな空を一部しか見れないくらいに高いビルが幾つも窮屈そうに連なり、なんといつても人が多い。

俺の住んでいる田舎町とは大違いだ。

行く人々は様々な人たちがいるが、その多くは自分以外の人の事を考えていないように見える。

他人に当たったって謝る人は少ない。それは不思議な光景だった。まるで人の心が都会という魔物に食われてしまったかのようだ。

都会は奇怪だ。

本当に、何か人の心を取り込んでしまう何かに住んでいるのではないだろうか。

俺は、それを疑ってならなかった。

この町には絶対何かがある。そう、確信さえあった。

何しろ、もう俺の隣にはこの街の魔物に取り憑かれた奴がいるからだ。

しかし、原因は別の所にはっきりとしたものがあるのだが。

「ん つ、あああっ！やっと着いたあっ！池袋お つ！！」

俺の隣で窮屈な線路という名の道の上を走る箱の中から解放され、

やっとの思いで地上に出られた少女は、そう言って開放感満ちあふれる、とても幸せそうでも楽しそうな表情を浮かべていた。

都会の迷路のような駅と人混みを潜り抜け、早くも疲れ果て嫌になった俺だったが、そんな少女の顔を見て、思わず微笑む。

そしてそんな少女はそんな俺の思いを知ってか知らずか、元気にサンシャイン60通りに向かって歩き始めた。

この少女は、俺の同級生であり、クラスメイトでもある三木結花<sup>みつきゆ</sup>。

今年で高二になる。

小さな細身の体に、栗毛の少し癖のついた長い髪を垂らした、まだ中学生といっても通りそうな少女である。

その細い体に、ふんわりとした尊柄のレースのついたスカート、首元にリボンのついた長袖の黒いシャツに灰色の少し大きめなシンプルではあるが可愛らしいパーカーを着た格好をした、少しラフな様子も伺わせる服を着こなした少女は、良く晴れた日に、都会の森の中を楽しそうに歩いていった。

そんな楽しそうな様子の少女を後ろから見ている俺であったが、そんな俺のことを少女が振り返り発見して、幸せそうに俺の手を握って一緒に歩き始めた。

……そう。この少女は、俺の彼女だ。

半年より少し前、俺が告白をしたことによりつきあい始めて今に至る。

小学校も同じで、昔から気になっていた存在であったのだが、高校で偶然の出会いを果たし、見事付き合うことになったわけだ。

少女は、俺が小学校の時にある事件から助けたことをとても感謝しており、そこから実は気になっていたと言っていたが、今はその事件のことは省略する。

俺は、言うまでもなく彼女のが好きだ。

だからこうして二週間に一度ペースで何処かにデートに行くわけだが、このデートは特別だった。

月に一度の池袋デート。

それは彼女にとっては欠かせない重要なものだった。

もう一度照れくさいが言う。俺は彼女が好きだ。

しかし、それとこれとは別で、この月に一度の池袋デートは、俺をととても疲れさせるものだった。

なにせこのデートは、少し普通のデートとは趣旨が違うからだ。

俺と会って話すとか、それよりも重要な事があるからだ。

それは。

「やったあーっ！着いたよ達樹くんっ！さあっ、早く入るおーっ

！」

ある建物を見つけた少女 結花は一段と楽しそうに微笑んだ。

そして俺の手を引いて小走りになる。

そう、その建物とは アニメイト池袋店。

俺の彼女は乙女系です。

……乙女は乙女でも、乙女ロード系です。

秋葉はあまり行きません。結花は男の人が苦手なので、男の割合の高い秋葉は苦手だからです。

なのに俺と一緒にいれて手まで繋げるのも疑問なのだが、まあ、繋げるようになったのも最近のことで、俺は特別だから大丈夫だと言っていた。

きっとそれは昔のあの事件のことも理由には含まれていると思うのだが、俺を通じて少しでも男と接する事が出来れば良いと思う。

……でも、男と仲良くされると、それはそれで困るのだが。  
とにかく、そんな事は今は関係ない。結花にとって重要なのはア  
ニメイトに行くことだ。

確かにあそこは異様に疲れるのだが、結花が笑ってくれるのなら  
俺と一緒に買い物付き合おうと思う。

人混みをやっつと潜り抜け、例のビルの前に着いた。

なんだかこの場所に来ると雰囲気少し変わる気がするのだが、  
気のせいだろうか。

幸せそうな結花の手に引かれ、俺はそのビルの中へと足を踏み入  
れていった。

アニメや漫画の絵で溢れかえる店内には、いつも圧倒されてしま  
う。

ジャンプとか、サンデーとか、メジャーな漫画しか詳しく知らな  
い俺にとっては尚更だ。

最近彼女と話が出来るようになって思うて深夜のアニメを少し  
見始めたのだが、まず、ネットで放送するアニメを調べていて唾然  
とした。

………いったい一週間に幾つやるんだ。多すぎる。これを  
全て見ている奴は相当な強者だと俺は感じた。まあ、このビルに通  
う奴は大体がそのアニメを見ているのだろうか。

………しかし、いつ来ても、このビルの中の視線は怖い。  
手を繋ぎながら入っていくと睨まれる。何故だろうか？

まあ、入ると結花は一人で駆けるように俺の手を離して先に行っ  
てしまうので、少し睨まれなくなるのがせめてもの救いだと思う。

しかし、手を繋いでいて何か悪いことでもあるのだろうか？男女二  
人だけで視線は恐いのだが。

そんな疑問を抱きながら、俺は結花の後をついて行く。

「……ここは狭いから邪魔になるとかそういうことだろうか？それだったら、離すべきだよな。」

まるで塔のように高く狭いこのビルを一階一階上っていったら、結花はいろんな商品を見て回り、目当ての商品が見つかるレジへと足を進める。

ここでは俺に買わせてはくれない。自分で買いたいのだという。その間、俺は別のところで商品を見て待っているのだが、正直言っただけのアニメや漫画の物なのかさっぱり分からない。少しは分かるのではと思ったのだが、全然であった。

アニメや漫画を愛するというのは、極めて難しい壁のように思えてくる。

あと、たまに男と男が絡み合うようなものが置いてあるのを見るのだが、何だか俺は踏み込みではいけない領域な気がする。いや、絶対踏み込みではいけないと思う。しかし、彼女はそんな場所も平気そうに歩いていくのだが。

結花が一番長く見て廻るのは、五、六階のグッズ売り場だ。

いろんなキャラのグッズが置かれているのを隅々まで見ていく。

そして他の階でも共通なのだが、俺の裾を引っ張って楽しそうに話しかけてくる。

「ねえねえねえっ、見てっ、これっ！イカちゃんのフィギュアだよーっ！可愛いねえーっ！」

「ああっ！イカ娘があっ。可愛いなっ。あのっ、青い髪の毛が動くやつだろっ？」

「違うよーっ！あれは触手だよっ？」

「あぁっ、そうなのか……………」

「あぁっ！こつちにはISのストラップだぁーっ！可愛いっ！私は一夏も箒もセシリアもリンもシャルもラウラも千冬ねえーもみんな可愛くて格好良くて大好きだなぁーっ！」

「あいえず？あいえず、あいえず……………あぁっ、あのっ、ドMの男が主人公の……………」

「？それはえむえむだよっ？」

「おおーっ！銀ちゃんのフィギュアだよーっ！アリスバージョンっ！可愛いーっ！銀ちゃんか神楽ちゃんがいいなぁーっ！エリザベスもトシも総吾も可愛いんだよなぁーっ！」

「銀魂かぁっ！あれ面白いよなっ！下ネタ多いけど……………なのになんでアリスなの？」

「……………そこは気にしなくてもいいのっ！」

「あっ！これ可愛いっ！ヘタリアの下敷きだーっ！ほらっ！」

「おおっ、これは国のやつだろっ？……………えっと、これがイタリアで……………」

「それイギリスだよっ？」

「あっ、間違えた……………こつちはアメリカ……………」

「それがイタリアだよっ？」

「……………これが日本……………」

「それは中国だよっ？」

「……………」

「……………」

「……………ごめんっ」

「いいよっ？別に。大丈夫だよっ？」

しかし、話しについて行けないのが悲しい。たまに分かって相づちを打つこともあるのだが、たまに情報があつちやになり間違っているようで、首を傾げられる。

申し訳ないと思うが、俺にとっては難しい問題だ。もっと、詳しくならなくちゃ……………」

そこでの買い物が無事終わると、近くにあるサンシャインなんかを見て回る。

食事をとったり、洋服を見たり、雑貨を見たり……………。時期によってはアニメとのコラボの関係でナンジャタウンにも行ったりする。

あの何故か年中暑苦しいビルから抜けたら、青い袋の存在以外はいつものデートと一緒だ。

いろんな話をしながら、いろんな所を見て回る。

あのビルとは差ほど離れていないのに、全然雰囲気が違うのは夢のようだ。

全然人の視線が変わる。周りにも幾つも男女で歩いている人が見えるのはやはり落ち着きをくれる。あそこは大違いだ。

しかし、俺はこの池袋デートが嫌いなわけでは決してなかった。確かにあそこは疲れるが、このデートの時が一番結花が幸せそうに笑うからだ。

昔、小学生の頃に見ていた結花は、少なくとも俺の前ではあまり笑わない子だった。

いつも独りで悲しそうに俯いていて、沢山本を読んでいた。

そんな結花が、高校生になった今、俺の横で微笑んでいてくれるのはとても嬉しい。

沢山の友達に囲まれて笑っていてくれるのがとても嬉しい。だから今、そんな結花を隣で見ることの出来る俺は幸せ者だ。

そんな事を思いながら俺は握っている結花の小さな手をさつきよりも少し強めに握る。

すると、それに気づいた結花が、俺に優しく微笑んだ。

一通り買い物が終わると、五時には電車に乗り込んでいく。

俺たちの住んでいるところは池袋から一本で帰れる所だが、まだ未成年の学生だし、あまり夜まで是一緒にいけない。

少しへとへとになっている俺だが、帰りの電車の中でいろんな会話を交わし、そして微笑みあう。

結花の笑顔はやはり落ち着く。

いつまでも、この笑顔は絶やさず守ってやりたい。

そんな思いも胸に抱きながら、俺は降りるべき駅へと着くと、結花を家の前まで送り、自らも家路に着くのだった。

「……………俺とっ、付き合っして下さいっ！」

そう顔を赤らめながら告白したとき、結花はとても驚いた顔をして顔を赤らめ、戸惑って逃げてしまったのを憶えている。

その時は振られたのだと思って相当落ち込んだのだが、その数日後、突然結花からメールが来たのを見て、今度は俺がとても驚いたのを憶えている。

そして、そのメールの内容が不思議な内容だったことも。

「……………あのっ、……………その……………っ、……………アニメとか、漫画とか、……………好きですか？」

突然送られてきたその内容に驚き首を傾げたのは言うまでもないが、その時は特に考えもせず、俺は焦って返事を返した。

「……………あぁっ、好きだよっ？」

「……………ヲタクのことって、……………どう思いますかっ？」

その後、少し間を置いて来た二通目のメールも、俺には結花が何を言おうとしたのか分からなかったのだが、素直に返事を返した。

「別にっ、いいんじゃないかなっ？行き過ぎて犯罪を起こすのは良くないけど、自分の好きなことに一生懸命なのは、良いことだと俺は思うよっ？」

そう送った後は、二時間経っても返事が来なくなった。

俺は不思議に思っていたのだが、三時間ほど経ったときに来たメ

ールの文面にはとても驚いた。

「……………私で良かったらっ、  
……………宜しくお願い致しますっ。」

そう書かれたメールが来たときには一瞬何のことを言っているのかわからなかったが、意味が分かったとき、飛び跳ねるほど嬉しかったのを憶えている。

そして後に結花がヲタクである事を知るのだが、正直、見た目や普段の性格からしても驚いたが、楽しそうに笑いながらアニメや漫画の話をする結花を見て、俺は思わず嬉しい気持ちになり、微笑んだのを憶えている。

しかし、最近疑問なのだ。

結花は、本当に俺のことを思ってくれているのだろうか？

アニメや漫画に向けられる結花の満面の笑みが、俺に向けられた事は無いのだ。

確かに、俺と一緒にいるとき、笑顔を向けてくれる。楽しそうにしてくれる。

しかし、それはアニメや漫画に向けられるものよりも劣る気がするのだ。

手を繋いだ事はある。

しかし、当然ながら抱きしめたり、キスをはしたことは無い。

男の人が苦手であるので、当然といっては当然な事だ。手を繋ぐまでも時間がかかった。

しかし、俺はこれでも高二の男子なのだ。

半年以上も付き合っていて、抱きしめたこともキスもしたこと無いのは正直辛いものがある。

結花には難しい事も分かっている。

しかし、いつか。

そんな事を想像していた俺は、次の瞬間に頭を振る。  
いや、結花を傷つけない。

別に、そんなこと出来無かったって良いじゃないか。

結花と一緒にいれば、手を繋いで笑顔で一緒に出掛けられれば。  
しかし、その案に肯定出来ない俺もいて、俺は腹を立てる。

そしてそのまま、そんな現実から逃げるように、俺は床に着いた  
のだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6336s/>

---

俺の彼女は乙女系っ!?

2011年11月16日18時47分発行